

# 絆むすんで

米陸軍の制服と帽子を身にまとい、カメラに向けた視線が、はにかんでいるように。胸に「FUJITA」とある。

藤田グランツ恭雄さん(67) 米カリフォルニア州ハイワード市。五歳から二年余りを、広島県五日市町皆賀(現広島市佐伯区)にあった広島戦災児育成所で過ごした。

「ここは私の出発点。六十年前を思い出し、感無量です」。育成日誌のコピーに目を通した藤田さんは、国際電話越しに声を震わせた。

一九四〇年、広島市舟入町(現中区)で和菓子製造を営む家に生まれた。軍隊に出て不在の父に代わり、祖父と母、弟と四人で留守宅にいた。原爆の爆心地から一き余りだった。運命の日。全壊した家から幼い兄弟を救った祖父と

母は、九月を聞かないうちに相次いで病没した。兄弟で比治山国民学校(現南区の比治山小)にあった孤児の收容所に入った一週間後、今度は弟が栄養失調で世を去った。触れたぬくもり 身寄りを失った藤田さんは四六年二月、育成所へ移った。優しい声、ぬくもり。

## 原爆を落とした国で



アメリカ陸軍での生活中(1964-1966年) 米軍に在籍した当時の藤田さん。米国人よりも米国人らしく振る舞おうとした(藤田さん提供)

# 恩讐超え悔いなき人生

食べた天ぷらのおいしさ 菓子職人ではないか」と誘われ、再婚した妻とともに、太平洋を渡った。 四八年五月、シベリアに抑留されていた父と再会を果たした。原爆で工場を失った父は、小さな店を転々とし、苦労を重ねた。五六した。東西冷戦の最中、当時の西ドイツに派遣され、母や弟を奪った原爆。それにも苦しめられた。だが「不思議と憎む気持ちはなかつた」という。「米国で一人前になる。それで精いっぱい」藤田さんの言葉が止まらなかつた。やがて声を振り絞る。「でも、私たちを受け入れてくれたのも米国。自分が進んだ道を後悔はしていません」

藤田さんはいま、育成所での体験に「プライドを持つている」と言い切る。 藤田さんはいま、育成所での体験に「プライドを持つている」と言い切る。 藤田さんはいま、育成所での体験に「プライドを持つている」と言い切る。

米陸軍を退役後、造園会社を興し、趣味で飼っていたニシキゴイの販売をビジネスにした。父の和菓子工場は、弟たちが継いだ。 思いとも重なるのだろうか。

妻の死因 白血球病 サクセス・ストーリーを 実感していた二〇〇二年、藤田さんは五つ年下の妻を亡くした。死因は白血病だった。妻は広島市出身で、生後六カ月で被爆していた。 (石川昌義)